

# 生涯教育月報

2016

春

季刊 No.110



創立40周年記念式典 ..... 2

評議員会および助成金授与式、  
論文入賞者表彰式 ..... 4

プロフィール・インタビュー  
早稲田大学 教育・総合科学学術院 教授  
油布 佐知子さん ..... 12



# 創立40周年記念式典



創立40周年を迎えた当財団は、2015年11月13日ホテルオークラにて記念式典を開催した。当日は多くの関係者が集い、改めて生涯教育の大切さを再認識する場となった。今回はその模様を紹介する。

## 北野隆典専務理事による挨拶

生涯教育を  
次のステップに進む  
きっかけに

式典の冒頭では、当財団を代表して北野隆典専務理事が以下のように挨拶を述べた。

「1975年、スタンレー電気の創業者・北野隆春が私財を提供して設立したのが当財団です。生涯教育の支援を目的として日本で初めて設立された当財団は、スタンレー電気の株式配当金とスタンレーグループからの寄付金によって活動してきました。つまり、同グループが長きにわたって発展し続けたからこそ、当財団は40年間さまざまな活動を継続することができたのです。これもひとえにみなさま方のご支援の賜物と心から有難く存じます。



生涯教育には二つの捉え方があると思います。一つ目は、生まれてから老後に至るまでの長い人生を学びによって豊かなものにするための生涯教育。二つ目は、人生の節目で新たに何かを学び、次の一歩を踏み出すための生涯教育です。

当財団では後者の支援を行っており、年齢を問わず、向学心のある方々に学びの機会を提供するため地道な活動を続けています。

創立者・北野隆春が重視していたのは、いつでも、どこでも、だれでも学べる体制づくりと学びに対する自主性です。これ

はスタンレー電気についても同じで、創業時から現在に至るまで向上心、向学心を大切にしています。そして、その支援を行う当財団も息の長い活動を続けていく必要があるという考えは今も脈々と受け継がれています。

規模の小さな財団ではございますが、小粒でもピリリとスパイスの効いた活動、そして学びの種をまくような活動を今後も続けていきたいと思っています。これからもご支援よろしくお願い申し上げます」

**公益財団法人公益法人協会  
太田達男理事長によるご祝辞**

**設立時の  
先進的な考え方を  
今後受け継いでいく  
ことを期待**

続いて公益財団法人公益法人協会理事長 太田達男さんにご祝辞を頂戴した。「40周年ということで、改めてさまざまな文献を拝読しておりました。その中でも最も感銘を受けたのは、設立趣意書です。



北野財団様が設立された1975年当時の日本は、まさに成長期真っ盛り。物を作れば売れる、そして日本の

経済力は右肩上がりに成長する時代でした。

しかし、この設立趣意書では、近代的産業化は、働く人々に高度の能力開発を要請する反面、働きがい・生き甲斐など、人間性の希求を高める結果になっていくと述べられており、生産第一主義から福祉優先への転換を訴えていたことがうかがえます。

文部科学省の中央教育審議会が生涯教育の重要性を指摘する答申を出したのは、それから6年後の1981年のこと。ここからも北野財団様の先見性がわかると思います。

財団法人の使命とは、政府や企業が取り組んでいないことや環境の変化をいち早く察知して、先進的な活動に取り組み人々を支援するということだと思えます。設立時からそのような使命を全うしてきた北野財団様には今後そのDNAを次世代へと受け継いでいただきたい。そして、今後さらなる発展を遂げていただきたいと考えています」

引き続き壇上に立ったのは、長年経理指導をいただいている出塚会計事務所の出塚清治さん。

「北野財団は設立から三代に渡り、40年間一貫した生涯教育に関わる支援活動に力を入れています。その活動は間違いなく世の中に貢献していると言えるでしょう。今後この事業活動を継続してまいります。財団を側面から応援してまいります」と挨拶され、乾杯の音頭をとった。



乾杯の発声をする出塚 清治さん



ソプラノ：井口 侑奏さん  
ピアノ：大本 絢子さん



ハーブ：山地 梨保さん  
第1バイオリン：野口 まつ子さん  
第2バイオリン：酒井 愛里さん  
ヴィオラ：山田 沙織さん  
チェロ：波多 和馬さん  
クラリネット：葛島 涼子さん  
フルート：加藤 菜月さん

その後は音楽奨学生による演奏が行われた。一曲目はオペラ『ロミオとジュリエット』より「私は夢に生きたい」。伸びやかで美しい歌声とリズムカルな心地の良い演奏で、会場は華やかな雰囲気となった。

二曲目はラベル作曲「序奏とアレグロ」。クラリネットとフルートの柔らかな音色から始まった演奏は、途中でハーブのソロ演奏を挟み、最後はそれぞれの楽器が織りなすハーモニーで会場を魅了した。

音楽奨学生による演奏の後は懇談を挟み、当財団の40年の歩みをまとめた映像を約5分間放映。設立当初の活動から現在の活動に至るまでを振り返る内容に、参加者のみなさんからは過去を懐かしむ声が上がっていた。



「40年のあゆみ」の映像を放映

式典の締めくくりには、長きにわたって当財団に貢献してきた方々を功労者として表彰した。功労者を代表して、理事を務める小松章さんが北野隆典専務理事より記念品を贈呈され、式典は和やかな雰囲気終了した。

約一時間の記念式典は生涯教育の大切さを再認識する場となった。当財団は40周年を迎えたばかりだが、次の10年、20年と先を見据えて継続的に生涯教育の発展に寄与していただけるよう一層の努力をしていきたい。



北野隆典専務理事より功労者表彰を受ける小松 章さん

# 評議員会および 助成金授与式、 論文入賞者表彰式

40年の歩みを次の世代へ



あいさつする市橋淳平常務理事

「継続は力」を  
実践しており  
ます。  
当財団は小  
規模ですが、そ  
の使命は、人間  
性豊かな人を  
育て、実りある

2015年11月13日、ホテルオークラにて評議員会および助成金授与式、論文入賞者表彰式が行われた。評議員会では、第42期決算および第43期予算が報告され、すべて承認された。

その後会場を移して、助成金授与式、論文入賞者表彰式が行われた。冒頭、財団を代表して市橋淳平常務理事が以下のようにあいさつした。

「当財団は、1975年に設立され、以降40年にわたって、学びを志す人々に学びの場を提供する事業を展開してまいりました。2010年12月には公益財団法人の認定を受け、今期は6期目に入りました。より公益性を高めた事業を行っていくように心掛けております。これもスタンレー電気をはじめ、多くの方々にご支援いただいているおかげと感謝をしております。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

研究助成金につきましては、今年で受給者の総数が87名、また創立2年後の1977年から実施している論文につきましまして、今年で37回目となり、応募者総数は1万921名になりました。まさに、

「私の研究題目は『知識欲と学習欲の断絶に関する実態調査』です。学校教育では、予め答えのある問題を扱い、その答え合わせをするという文化がありますが、そのことが、何かを知りたいと思ったときに答えだけを知りたいという行動につながってしまうという問題があります。私はそれを知識欲と学習欲が断絶している状況と見なし、生涯学習社会の基盤的基盤の危機と捉えています。なぜ社会においてそのよ



小嶋季輝さん

人生を送り、そして、自己の人格を磨くことができるように、その生涯にわたって、学べる機会を提供することだと考えております。今後も皆様のお力添えを得ながら、公益財団法人として、より充実した内容の事業を創出し、提供してまいりたいと思っております。今後ともご支援のほどよろしくお願いいたします」

続いて、生涯教育に関連する調査・研究を支援するための研究助成金の授与式が行われた。今年9人が受賞し、香川大学大学院教授の木全晃さんら8名が出席した。受賞者を代表して、琉球大学教育学部講師の小嶋季輝さんが研究概要を発表した。

続いて、一般助成金(今年度は出版助成)の授与式が行われた。受賞者は、1925年にニューヨークでベストセラーとなった杉本鉞子の「武士の娘」という本がどのようにして書かれ、またなぜ外国人にこれほどの支持を得たのか、その生涯に迫った本「鉞子、世界を魅了した武士の娘の生涯」の作者、内田義雄さん。概要を



研究助成金授与者の皆さん  
左から松下 聖子さん、一人置いて福島 賢二さん、児玉 晴男さん、野村 憲一さん、小嶋 季輝さん、木全 晃さん、中澤 明子さん、井上 洋二さん

うな学び方がとられ、維持されてしまうのか、その断絶状態を乗り越えていく場合の回復のメカニズムについて具体的事例を取り上げ、研究しているかと考えています」

以下のように述べた。「私はNHKのディレクターだったので仕事柄多くの人に出会っていますが、この本を書いて初めて、地方の教養あるご夫人たちとの出会いがあり、感慨を覚えました。そのお一人に、米国で出版することを勧められ、翻訳を進めています。難しい内容なので翻訳料がかかるのですが、このたび財団に後押ししていただけることになりました。これから米国で出版社を探します。ゆくゆくは映画化されたらよいなあと思っています」



出版助成金を授与された内田 義雄さん

最後に、第37回懸賞論文入賞者の表彰式が行われた。今回のテーマは、40周年にふさわしい内容として、「私の生涯学習―学ぶ楽しみ」だった。全国から444編が集まり、19編が入選し、論文集に掲載された。表彰式には8人が出席し、市橋常務理事から表彰状と賞金が授与された。

## 入賞者インタビュー

### 第1席「学ぶに遅すぎることなし」

**対比地 百合子さん（愛知県・67歳・心理療法士）**

英語教師を引退後、40代から60代までの大人たちが我が家に集まり、英語の勉強を始めました。彼らは中学を卒業して以来、勉強する機会

がなかったりして基礎をまったく忘れていたが、5年後には一週間の出来事をスピーチできるまでになりました。卒業の言葉として「Never too late to learn（学ぶに遅すぎることはなし）」を送ったら、生徒の一人が「先生、勉強すればするほど、知らないことはでてるんだよ。だからこれから生涯勉強するよ」という言葉を掛けてくれました。学ぶ楽しみを糧に一生懸命勉強したい彼らと受賞の喜びを分かち合いたいと思います。

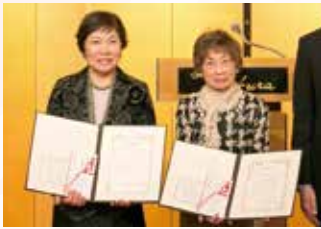


1席入賞の対比地百合子さん

### 第2席「学びは一条の光」

**高見 スマ子さん（兵庫県・68歳・兼任講師）**

論文には、私の生き方そのものを書きました。学びはエンパワーメントにつながると思いますが終わったら、経済的に恵まれない子どもたちのために活動したいと思ひ、そのための国家試験の勉強をしています。



2席入賞の高見 スマ子さん（左）と萩原 美和子さん

### 第2席「歌の翼に」

**萩原 美和子さん（東京都・76歳・無職）**

40代でコーラスを始めました。歌はどこにいても歌えますし、おばあさんになっても歌えます。合唱は、声を合わせるだけでなく、団員みんなが心まで一つにしないと歌えません、そういう団結心や仲間の存在もコーラスの魅力です。

### 第3席「まわり道が教えてくれたもの」

**頼富 雅博さん（群馬県・53歳・日本語教師）**

教員を辞職し、日本語教師と児童自立支援ホームでのボランティアを始めました。外国人の生徒たちやホームで出会う人たちに教えられ、私が生徒だという気がします。一緒に学ぶ仲間の存在が、生涯学習と言えるのではないのでしょうか。

### 第3席「転がれ、ヒョッコ〜」

**村松 靖彦さん（長野県・53歳・高校教諭）**

50歳を越えて、若いころからの役者になりたいという夢を叶え、初舞台を踏むことができました。教師を退職したら、地域のボランティアをしながら、役者としても映画や舞台に声が掛かるように頑張りたいと思います。

### 第3席「私の生涯学習〜学びが導いた奇跡」

**出口 久美子さん**

**（長崎県・55歳・公民館非常勤職員）**

私には2人の恩師がいます。「体がきついな」と思っている時ほど、いい仕事ができるんだよ」という和裁の先生の言葉、「自分の分からなさを大切にしてください」という通信制高校の先生の言葉を励みにコツコツ勉強してきて、今ここにいるのだと思います。

### 第3席「学ぶ喜びが高じて」

**渋谷 江津子さん（青森県・67歳・美容師）**

大人になって、学ぶことには特別な喜びがあり、本当の喜びがあることを知りました。私が立ち上げた弘前文学学校の中から将来大き

な賞をいただけるような生徒が育ってくればよいと思います。

### 第3席「カンツォーネ」

**七里 彰人さん（愛知県・77歳・無職）**

中学生の頃に懸命に練習していたカンツォーネ。仕事一筋で歌は封印していましたが、74歳のときに文化センターで再開したら、夢中になってしまいました。コンサートの後、今まで生きてきた中で一番幸せだと思ったことを書きました。



3席入賞の皆さん  
左より頼富 雅博さん、村松 靖彦さん、出口 久美子さん、渋谷 江津子さん、七里 彰人さん

# 生きることは学ぶこと 自分なりの生涯学習を



明治大学大学院長  
小笠原 英司

人生85年で長くなる  
学びの時間

審査委員会の仮の委員長を務めている小笠原です。今、仮と申しましたが、2年前までは森隆夫先生が審査委員長を務めておられました。また、森先生と一緒に長らく審査を務めておられた山田雄一先生もいらつしやいましたが、このお二人が40周年記念式典に不在なのは本当に残念なことです。しかし、こうして北野生涯教育振興会が40周年を迎えることができ、審査委員として大変喜ばしいことと思っております。

今回のテーマ設定には、40周年ということもあり大変知恵を絞りましたが、最終的には財団の趣旨そのものでいこうということになり、「私の生涯学習―学ぶ楽しみ」としました。例年の1.5倍の444名の応募があり、厳しい審査を経て19名の方が入選されました。生涯学習というテーマの特性上、高年齢の応募者が多かったように思います。ちなみに入賞者19名の平均年齢は67.3歳で、75歳以上の方が7名含まれ、最高齢は87歳でした。

今日、我が国は世界一の長寿社会です。2013年の時点で、日本人の平均寿命は約84歳。人生85年と言われる中で、職業生活が45年とするとポスト現役の時代が20年あるということになります。

人間生活にとって「学び」は、その中心に位置します。学ぶという行為は自己啓発という主体的営為の具体的な形態に他なりません。人間とは学ぶことを生きることと同義とみなす生きものと言えます。つまり長寿になるということは、それに応じて学びの機会も長期化していると言えるのではないのでしょうか。日本のような超高齢化社会でかつ長寿社会は、生涯学習社会の先進国と言えます。

これは、ポスト現役世代が非常に重要になっているということを意味しています。ところが私が見るところ、社会ではポスト現役時代の人々が軽視されています。言葉にそれが表れています。「老後」って何でしょう。老の後といったらあの世ですか、この言葉はおかしいですよ。また、私は「前期高齢者」ですが、「後期高齢者」という言葉もそうです。言葉選びは、教養のレベルを表しますが、我が国のエリートと呼ばれるお役人

の方たちがこの程度の言葉選び能力しか持っていないというのは、非常に残念です。

## ポスト現役で 完熟を目指す



さて、先ほどポスト現役世代が重要であるという話をしましたが、「生涯現役」という人生観もあります。かつてプロ野球の野村監督が「生涯一捕手」という言葉を残しましたが、素晴らしいですね。研究者、芸術家、文芸家、芸能人、専門職人といった特殊な職能の人々は、特定の分野に特化しているがゆえに、職業と生きがいとが一致している場合が多く、可能な限り終身現役を全うしたいと思っている人が多いようです。大学の教員も一生涯研究を続けるタイプが多々あります。彼らにとっての学びは、「専門」です。彼らの「(専門)道」に終わりはありません。「道を極める」ためには、思想も、技も、人間関係もすべてが学びの対象で、機会です。私はそういう真性の研究者からは外れているので、ぜひ第二の人生を歩みた

いと思っています。歌手が俳優になりたいですね(笑)。

他方、40、50代で早期退職して人生の舞台を転じ、転職や田舎暮らしなど過去のしがらみにとらわれない「第二の人生」に踏み出す人もいます。新たな状況に適応するためには、これまでとは異なる人々と接し、新たな生活知識を学び吸収することが不可欠です。これもまた、学習ではないでしょうか。

生涯教育の視点から考えると、ポスト現役世代は、やり続けてきたことの集大成をする時期ですが、一方で、やりたかったことへの挑戦の時期でもあります。一席を受賞された対比地さんの「学ぶに遅すぎることなし」に書かれているように、論文には、やりたいことに臆せず挑戦した人が多く書かれていました。中学を卒業して学業を断念したが短期大学の講師にまでなられた方、49歳で高校進学を目指した方、60歳で短大生になった方……本当に感嘆の言葉しか出てきません。応募者の皆さんは「生涯学習」の定義はおろか、その手段にも方法にもとらわれず、自由に、

自分なりの「生涯学習」とらえ、「生きる」という視点から「学び」を位置づけている、ということに気付かされました。皆さんが日常を生きるなかで何かに学ぶことによって「活きて生きている」という「生活」の本義を實現されていることを知ることができました。今回のテーマの大きな収穫だったと思います。ポスト現役は、その後、老年などと言っていないで、完熟を目指す時期ととらえるべきです。

## 貴重な経験を 文章に残そう



同時に、この世代にも、当然与えられた使命があります。後輩や若い人々から、学ばれるという役目です。ちなみに今回の応募者には、教職者が多くいました。教える人は、学ぶことが好きなんです。私も教壇に立って実感しましたが、教えることは、学ぶことです。一方、学ぶ立場からすると教え方がうまい先生ばかりではありません。反省すべきことのひとつが、しゃべり過ぎないということだと思っています。その一策として、自

分がこれまで経験してきた貴重な財産にさらに磨きをかけて、文章に残してみてください。今回の論文の執筆に際し、書くことの辛さも味わっていただいたのではないのでしょうか。ぜひこれからも書くことに励んでいただきたいと思います。本日はどうもありがとうございました。

〈私の生涯教育実践シリーズ'15〉

### 『私の生涯学習』

—生きることは学ぶこと—

1,000円  
ぎょうせい刊

ご希望の方は財団事務局までどうぞ。





## 「美術鑑賞」(その50)

2015年9月4日(金)~5日(土)

# 初秋の軽井沢・甲府の美術館を訪ねて

美術研究家沼辺信一さんを講師にお迎えして、軽井沢と甲府の3つの美術館を訪ねました。軽井沢では現代美術の名品の数々と出会い、建物のすばらしさや庭も楽しみ、山梨県立美術館では、北野財団創立40周年記念として開催の「彫刻奨学生の現在展」も鑑賞しました。2日間を写真でご紹介します。

### 1日目 ■ 軽井沢千住博美術館



「軽井沢千住博美術館 展示風景」  
撮影：阿野太一 ©軽井沢千住博美術館

### ■ セゾン現代美術館



セゾン現代美術館エントランス付近  
庭の木々の緑が美しい



「星のふる夜に #14  
When the Stardust Falls  
#14 1994」  
©軽井沢千住博美術館  
©HIROSHI SENJU  
MUSEUM KARUIZAWA



セゾン現代美術館の建物を背景に記念写真

### 2日目 ■ 山梨県立美術館



「彫刻奨学生の現在展」を鑑賞



山梨県立美術館  
外観



彫刻奨学生の作品  
が常設展示されて  
いる「大窪いやしの  
杜公園」にて  
作品を鑑賞後帰途  
につく

## 「美術鑑賞」(その51)

2015年12月11日(金)

# さようなら神奈川県立近代美術館 鎌倉館

神奈川県立近代美術館は日本がまだ占領下にあった1951年(昭和26年)、日本で最初の公立近代美術館として鎌倉の鶴岡八幡宮境内に開館しました。鶴岡八幡宮との借地契約満了に伴い、2016年1月末をもって閉館しましたが、閉館前にここを訪れ、近代美術館として果たしてきた役割や、建築家坂倉準三による建築のすばらしさについて検証し、「カマキン」の愛称で親しまれた美術館との別れを惜しましました。講師の美術研究家沼辺信一さんに当日を振り返っていただきました(氏のブログより再録)。

時ならぬ「冬の嵐」と呼びたい悪天候。誰もが外出を控えるような荒天だったが、前々から予定していた美術館見学ツアー当日なので、観念して早めに千葉の自宅を出た。



目論みよりも半時間ほど遅れて鎌倉駅に到着。集合場所に駆けつけると参加予定者の半分以上が未着だという。それでも十一時には全員が集まったのでマイクロバスで海を臨む「スタンレーサーフサイド」という研修所へ。

そこで「さよなら《カマキン》」と題して神奈川県立近代美術館の歩みをざっと紹介。MoMAに始まる「近代美術館」の系譜も絡めて話したので内容がちよっと複雑になってしまったかも。そのあと一同は再びバスに乗り込み、北鎌倉の和食屋「鉢の木カフェ」にて精進料理をいただく。この頃には空はすっかり晴れてしまった。

二時きっかりに神奈川県立近代美術館 鎌倉に到着。まず池越しに美術館の全容を眺められるスポットに案内して、全員で記念写真。

こんな天候なので館内はガラ空きに近い閑古鳥状態。これ幸いと

皆をあちこちに案内し、建物の細部をじっくり鑑賞。今日ばかりは展示作品よりも美術館そのものに目を凝らす。なにしろこれで見納めなのだ。階段を降りて中庭とピロティを兼ねた空間に出ると開放的な気分になり、誰の口からともなく「わあ」とも「ほお」ともつかぬ歓声が漏れる。

ここは本当に特別な場所だ。ピロティ軒下に吊られた内藤礼の紐状の作品が風で激しく揺れていた。これはこれで緊張感を孕んでいい。

最後は別館へ赴き、夕暮れ時の半時間を静かに過ごす。荘厳な日没。バスで鎌倉駅前まで戻って見学ツアーはつつがなく終了。





# デジタル一眼レフ カメラ入門 (その2)

2015年9月10日(木)～11日(金)



講義、作品講評はスクリーンに投影してわかりやすく説明されました

今回で2回目となるデジタル一眼レフカメラの入門講座を鎌倉材木座の研修施設を拠点に開催しました。撮影テーマは「わたしの見つけた瞬間」。2日間の講座は講義、撮影実習、講評に加えて、懇親会もあり、忙しくも大変密度の濃い充実した内容となりました。

日本大学芸術学部写真学科助教の穴吹有希先生を昨年に続いて講師にお迎えし、お手伝いには同大助手の安達洋子さん、学生の小田倉璃菜さん、代市千晶さん、福原歩さんが協力してくれました。

初日は午前中の講義の後、「フラワーセンター大船植物園」での撮影実習。小雨模様でしたが、雨粒が作品をよく引き立ててくれます。参加者は温室へ花壇へと思い思いの場所で撮影を楽しみました。

二日目は北鎌倉「建長寺」で撮影の後、講評会にて穴吹先生か

らそれぞれの作品に対してのコメントをいただきました。最後に、「写真はコツコツと続けていくことが一番重要です。続けていくことで、自分の色合いや、撮りたいものが見つかってきます。失敗しても投げ出さず、うまくいったことを伸ばし、失敗したことから学ぶ。絶対うまく撮ってやると思って力むと面白いものは撮れません。素直な気持ちで力を抜いて楽しんで撮った中から1枚でも2枚でも良いものがあればいいと思います。また次回の講座で、皆さんの成長された姿を見られればうれしいです」との言葉で講座を結びました。



懇親会では尽きない写真談義に時間を忘れ...

## 写真展「わたしの見つけた瞬間」vol.2

2015年10月9日(金)～19日(月) 於中目黒GTギャラリー

誌上写真展



# 第31回 彫刻奨学生作品展開催

2015年12月8日～19日、日本大学芸術学部江古田キャンパス内で、「第31回 彫刻奨学生作品展」が開催されました。  
5人の奨学生の作品が展示され、多くの方に鑑賞されました。



武蔵野美術大学大学院  
中川 智香子さん  
「シャボン玉のふくところ」



日本大学  
根本 祐杜さん  
「裸のランチ」



日本大学  
野口 紗綾さん  
「ROOM」



日本大学  
藤倉 聡士さん  
「漂流者のための」



多摩美術大学大学院  
村上 直樹さん  
「衝突！」



ベトナム



経営管理大学授与式会場にて奨学生と関係者の皆さん



経営管理大学喜びの奨学生と  
記念撮影



国立農業大学で  
奨学金を授与される皆さん



中国



広東工業大学奨学生と関係者の皆さん



工場見学する  
広東工業大学奨学生

## 2015年 外国人奨学金

ベトナム経営管理大学  
ベトナム国立農業大学  
広東工業大学

### 奨学金授与式

当財団では、海外と日本の友好関係につながることを期待して、成績優秀であっても貧しい海外の学生たちに援助を行う奨学金制度を実施しております。

2015年9月21日にベトナム経営管理大学にて、ベトナムスタンレー電気の鈴木重夫社長、財団から市橋淳平常務理事、城真二事務局長が出席し第1回目の奨学金授与式が盛大に行われました。奨学生20名に対し、一人当たり576万VND/年の奨学金を授与しました。

2015年10月12日には、ベトナム国立農業大学にて15名の学生に奨学金を授与しました。

2015年12月18日には、広州スタンレー電気にて冨永伸治総経理出席のもと奨学金授与式が行われ、奨学生の皆さんは広州スタンレー電気の工場見学も行い交流を深めました。

## お知らせ



第38回  
事実に基づく小論文エッセー募集  
「私の『先生』」  
誰からも、何からも学べる」

吉川英治の「我以外皆我師」という言葉のように、学ぶことは誰からでも、何からでもできます。人の例で言えば、親・友達・学校の先生・上司や部下などを含めた職場の人・旅で出会った人・歴史上の人物など、その他、宇宙・海や山・植物・動物などの自然、さらに本から学んだ知識・困難を克服した自分の体験など、あらゆるものから学ぶことができます。

人は、学ぼうとする心、強い向上心、自己を成長させようという意思があれば、いろいろなことから学び、成長していくことができるはずで、す。豊かで、充実した人生の生き方の手本となるような小論文やエッセーを多数応募ください。

**応募規定** 縦書き400字詰め 原稿用紙8枚〜10枚  
2016年5月24日(火)

**締切** 2016年5月24日(火)

**賞金**  
1席(1編) 賞状・副賞50万円  
2席(3編) 賞状・副賞10万円  
3席(5編) 賞状・副賞5万円  
佳作(10編) 賞状・副賞3万円

**入賞発表** 2016年8月初旬

**表彰式** 2016年11月11日(金)  
会場 ホテルオークラ

## 表紙ギャラリー

当財団の使命は、一生学び続ける人を応援することです。学ぶ人が、今日よりも明日、一步でもよくなるよう努力するには、目標が必要だと思えます。そこで、世のため、人のために偉業を成し遂げた偉人を目標に掲げたいと考え、財団機関誌の表紙に登場いただくことにしました。

### 福沢諭吉 (1835 ~ 1901)

1万円札の顔 福沢諭吉は、啓蒙思想家、教育者として知られています。アメリカやヨーロッパを訪れ、西洋の政治・社会制度を理解して、日本に西洋の学問を普及する必要性を痛感し、『西洋事情』の発刊に至りました。さらに「天は人の上に人を造らず」の言葉で有名な『学問のすすめ』を発刊し、自分の暮らしをよくするために学問し、政府に対して意見できるよう独立自尊の精神を説きました。この考えは、慶応大学創設の理念にもなっています。生涯教育を標榜する当財団は、この7月、「伝承研修」で諭吉のふるさと九州中津市を訪ねます。



## 第141回研修会

ライフプランセミナー(その6)  
夫婦で考える定年後の  
ライフプランセミナー  
(昼食付 目黒雅叙園 西欧料理  
クラブラウンジ ランチbuffet)

専門講師の指導により、定年後のライフプランを作成するセミナーです。講師は、(株)活性化セミナー研究所会長の奥畑研司氏ほか2名「生きがい」と「ライフプラン」年金に関する基礎知識「長期家計プランの作成」「私のライフプラン」「健康管理について」などのセミナーを予定。

**日程** 2016年5月28日(日)  
9:30〜17:30

**会場** 目黒雅叙園

**会場費** 夫婦で4,000円  
(1人参加の場合2,000円)

## 奨学生募集

— 学習意欲のある社会人を応援 —  
奨学対象と奨学金  
・科目等履修生 年間20万円  
・放送大学大学院修士全科生 年間

10万円を2年間

・放送大学選科履修生 年間7万円  
申し込み者の中から書類選考します。なお、奨学金金は給付で、返済不要です。

**締切** 2016年4月28日(木)  
詳細は当財団ホームページをご覧ください。  
なるか、直接事務局へお問い合わせください。

## 新財団理事・事務局長紹介

財団活動の充実を図るため、次の方々に協力をいただくことになりました。

理事  
耳塚 寛明さん(62)  
お茶の水女子大学  
教授



事務局長  
城真二さん(57)  
スタンレー電気(株)  
経営企画室  
秘書課より  
現職に就任



## 討報



島村 毅さん  
元当財団事務局長  
2016年1月18日逝去  
(享年71歳)

当財団に10年間勤務し、2011年に退職後も賛助会員となり、財団活動を支えていただきました。謹んで心よりご冥福をお祈り申し上げます。

## こ・ち・ら・編 集 室

NHK連続テレビ小説「あさが来た」の放送を楽しみにしている方も多いのではないのでしょうか。編集人も、嵐館経営をはじめ、銀行、生命保険会社を設立、さらに日本女子大学創立に多大な貢献をした女性実業家広岡浅子の九転十起の活躍に喝采を送っている一人です。

女性であるがゆえに学ぶことさえ禁止されていた時代に、まっすぐな気持ちで世の中に役立つことをめざして努力し続けた浅子を、著書を通して思想的後押しをした人の中に福沢諭吉の名前があげられるのは大変興味深いことです。

## 設立目的

当財団は、スタンレー電気株式会社創業の北野隆春の私財提供により、生涯教育の振興をはかる目的で1975年6月23日、文部省(現文部科学省)の認可を得て発足しました。当財団は、いつでもどこでもだれでも学べる体制をつくり、学ぼうとする方々に対し、より豊かな生きがいを持つよう、時代が求める諸事業を展開してまいります。

## 生涯教育だより 第110号

2016年3月10日発行  
編集人 市橋 淳平  
発行人 北野 重子  
発行所 公益財団法人  
北野生涯教育振興会  
〒153-0053  
東京都目黒区五本木1丁目12番16号  
電話 東京 03(3711)1111



早稲田大学  
教育・総合科学学術院 教授

**油布 佐和子**さん

YUFU SAWAKO

# 人それぞれの探究心を 学ぶことを通して 満たしていきたいましよう

2015年度より、当財団の懸賞論文の審査委員を務めていただいている油布佐和子さん。教育学の研究者として歩んでこられたご経歴や生涯教育への思いをお聞きしました。



— 中学校の教諭を経て大学院に進まれ、研究者としての道を歩まれています。が、研究の道に進まれたきっかけは何ですか。

私が就職した頃は、女性が一生働き続けるなら公務員か教師と相場が決まっていた。中学校時代に役割モデルになる良い先生に出会ったこともあり、卒業後は中学校の社会教諭として就職。1年目は担任したクラスをうまく運営することができずに自信を喪失していたのですが、ここで辞めたらしつぱをまいて逃げていくことになると思い、翌年には学級

目標を明確にして計画的に取り組んだところ、「2年目までここまでできた人はいない」と褒められるまでになりました。3年目は3年生の担任の予定だったので、生徒の進路を偏差値で輪切りにする受験指導に気が進まず、教育の現場で起きている問題に違う角度から取り組みたいという思いで、大学院への進学を決めました。私が専攻した教育社会学とは、教育に関わることを社会的な理論で考察する学問です。教師集団の過剰な同調や出る杭を打つような行動はどうして起こるのかといった諸相を研究してきました。

現在は教職大学院の教授として、広い視野から学校や教育を考え、制度変容につながる方法を模索しています。教育制度の枠を超えられるような教師を育てたいと思っていますが、なかなか難しいですね。

— 研究者としての人生を歩まれてきました。が、どのよう感じていますか。

私は若いときから、いろいろなことに理不尽さを感じて生きてきました。昔は、女子学生の就職が自宅通勤でないとい

になるということに始まり、今では考えられないようなことも多かったと思います。社会学と出会い、学問を通してその理不尽な原因を探れることに幸せを感じています。もし研究者でなかったら、不満ばかり口にしていただけの「不満ばあさん」になってしまいます(笑)。

— 懸賞論文の審査員を務められましたが、どのような感想をお持ちになりましたか。

どの作品にも感動して、ぼろぼろ泣いてしまいました。応募者の中にはお年を召した方も多く、若い頃に学びたくても叶わなかった夢を、年をとってから実現されている方もいました。論文に書かれているシチュエーションを想像するだけで胸が熱くなりました。好奇心、探究心は衰えを知らないものですね。

— 生涯教育についてはどのようにお考えですか。

このインタビューで早稲田大学教授の森山先生が、生涯教育には大きく分ける

と「役に立つ」型と「楽しむ」型があり、たくさん形の形があるとおっしゃっていましたが、本当にそうだと思います。懸賞論文の応募作にも書かれていましたが、教えることによって教えられるという形もありますし、自転車に乗って地域を回り、再発見していくという形もあります。人それぞれの探究心を形にしていけることが、生涯教育ではないでしょうか。

— 趣味は何ですか。

もともと凝り性で、一つのテーマをことん探求してしまいます。その一つが突端を訪ねること。日本全国の岬を訪ねてきました。不便な所が多いので、人っ子一人いないことがほとんどですが、そんな場所で、海からやってくる人を迎えるために立ち続ける灯台の姿にロマンを感じます。また、海外の名なき教会を巡ることも好きです。宗教そのものに関心はないのですが、遠い昔からその場所に根を下ろし、多くの人が祈り続けてきたことに思いを馳せてしまいます。

— 最後に、読者にメッセージをお願いします。

年齢を重ねても知的好奇心は衰えませんし、その機会は誰でも生涯保障されるべきことだと思います。さまざまな形で、学ぶことを楽しんでいきましょう。

教育の現場のさまざまな課題に取り組んでこられた油布先生の言葉には、教育者としての責任感と学ぶことへの熱い想いが溢れていました。今後のご活躍をお祈りしています。



日本最南端佐多岬  
(1995年頃)と日本最  
北端宗谷岬(2004  
年6月)の到達証明書

